

一 兄の部活

春の演奏会^{えんそう}で、陽太^{ようた}は初めて、兄の大輝^{だいき}がトランペットをふくところを見た。体育館の明かりが少し暗くなり、兄が一人で立ち上がった。金色の楽器が光を受けて、高い音がまっすぐのびていく。陽太はひざの上でこぶしをにぎったまま、息をするのも忘れていた。

演奏が終わると、陽太はだれよりも大きく手をたたいた。中学生になったら、ぼくも吹奏楽部^{すいそうがくぶ}に入つて、兄ちゃんみたいにソロをふく。帰り道、陽太は何度もそう口にした。

夏休みに入つてすぐの夜、兄はなかなか帰つてこなかった。陽太が玄関^{げんかん}で待っていると、九時近くになつて、やつとドアが開いた。

「兄ちゃん、おそかったね」

兄は返事をしないで、楽器のケースをゆつくり下ろした。口びるのはしが赤くはれて、少し血がにじんでいた。シャツの背中中、あせでぐつしよりぬれていた。

陽太は、部屋に入つた兄のあとをついていった。つくえの上のノートには、「高いド 二十回」「タンギング 五十回」と、細かい字がびっしりならんでいた。ページをめくつても、めくつても、同じような字がつづいていた。

「毎日、同じところを百回ふくんだ。それでも今日、大会のソロは、ほかのやつに決まった」

兄はそう言つて、ノートをとじた。陽太はあの金色の光を思い出そうとした。けれど、目に入るのは兄のはれた口びるばかりだった。ふくらんでいた夢が、空気のぬけた風船のようにしぼんでいた。

「……そんなに大変なら、ぼく、やめとこうかな」

兄はしばらくだまっていた。それから引き出しを開けて、銀色の小さな部品を取り出し、陽太の手にのせた。

「マウスピース。ふいてみる」

陽太が思いきり息をふきこむと、ぶう、とおかしな音が出た。兄が、今日初めて笑つた。

「おれも最初はそうだった。でもな、一回いい音が出ると、やめられなくなる」

兄はケースからトランペットを出して、窓を開けた。音をおさえて、演奏会でふいた曲の始まりを短くふいた。はれた口びるのせいで、少しかすれた音だった。それでも、あの日と同じメロディだった。

開いた窓から夜の風が入ってきて、カーテンを大きくふくらませた。

陽太は、手の中のマウスピースをにぎりしめた。あんなに大変なのは、正直こわい。それなのに、胸のおくのどきどきが止まらなかった。

「兄ちゃん、もう一回、ふいてもいい」

兄は「何回でも」と言つて、窓の外を見たまま、もう一度トランペットをかまえた。

一 兄の部活 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

二 姉の受験勉強

姉の遥^{はるか}の部屋には、夜になると、いつも電気スタンドの白い光がともっていた。中学三年の姉は、高校受験をひかえた受験生だ。夕飯がすむと、姉はすぐに部屋にもどって、夜おそくまで出てこなかった。

ある日、わたしは姉がいらないあいだに、こっそり机^{つくえ}をのぞいた。ノートには色ペンで線が引かれ、図や矢印がきれいにならんでいた。まるで教科書のようなだった。ページのすみには、小さな字で「入試まで、あと百二十日」と書いてあった。

わたしは姉のいすにすわって、同じ色ペンを手に取ってみた。来年は、わたしも塾^{じゅく}に通って中学受験をしたい。姉みたいな受験生になるんだ。そう考えると、顔が自然にゆるんだ。

「千夏^{ちなつ}、何してるの」

ふり向くと、姉が立っていた。わたしはあわてていすからおりたが、姉は「いいよ」と笑って、わたしの頭を軽くなでた。

それから三週間たった、冬の夜のことだった。お茶を持って姉の部屋に入ると、姉は机にうつぶせていた。机の上には、模試^{もし}の結果の紙がある。点数は、前よりずっと下がっていた。

「お姉ちゃん、わたしもね、受験生になったら」

「遊びじゃないんだよ」

姉は顔を上げずに言った。机には消しゴムのかすが山のようにたまり、ノートは何度も消したせいで、ところどころ破れていた。ペン立ての色ペンは、ばらばらにたおれていた。

わたしは、お茶のコップを持ったまま動けなかった。きれいなノートの向こうに、こんな夜があるなんて知らなかった。受験生になりたいという気持ち、急に小さくなっていった。

しばらくして、姉がゆっくり顔を上げた。目のまわりが赤くはれていた。

「ごめん。言いすぎた」

姉はぶあついノートを一冊、わたしの前に置いた。表紙のかどが、丸くすりきれていた。まちがえた問題だけを書き写したノートだという。どのページにも同じ問題が二回も三回も書いてあり、最後に赤い丸がついていた。

「昨日できなかった問題が、今日できるとね。ほんの少しだけ、自分のことが好きになれるの」

わたしは赤い丸を指でなぞった。大変なのは、もう分かった。こわいのに、指先がじんわりあたたかくなった。わたしもいつか、こんな丸を自分のノートにつけてみたい。

窓の外では、冷たい夜空に、星が一つだけ強く光っていた。

「お姉ちゃん、となりで算数のドリル、やってもいい」

姉は電気スタンドを少しずらして、わたしの場所を作ってくれた。

二 姉の受験勉強 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。